

## 『太平記綱目』小考(一)

——成立と著者をめぐって——

### 一 はじめに

南北朝の内乱を描いた軍記物語の雄篇『太平記』は、近世のはじめ、十七世紀前半期に、古活字本・整版本が盛んに版行され、いわゆる流布本による大普及時代を迎えることになるのであるが、こうした広範な流布は、その読解・鑑賞のための注釈書の出現をうながし、『太平記賢愚抄』『太平記鈔』という、すぐれた注釈書が相次いで上梓されている。

また、南北朝時代の政治と合戦の百科全書ともいえるべき『太平記』に、政道論・兵法論の観点から批判・論評を加え、政道・兵法などに関わる異伝・裏話の類を補説した評判書『太平記評判秘伝理尽鈔』『太平記評判私要理尽無極鈔』も、この時期に世にあらわれて、書物として流布する一方、これをテキストとした、いわゆる理

加 美 宏

尽鈔講釈も、武士階層を中心に広く行われた。

こうした評判書盛行の背景には、関ヶ原合戦の後、家康が諸大名の大移動を行ない、大名・上級武士らの支配層は、新たな領国の経営・「撫民」政策のために、政道の規範や理念を求めており、実戦で腕をふるう機会を失った武士層の間では、兵法・軍略を理論的に探求し、それを体系化・思想化しようとする気運があったことなどがある。

十七世紀の後半になると、『理尽鈔』に視覚化の工夫を加え、その内容を図示した『太平記理尽図経』(一六五六年刊)や、前記の注釈書や評判書を集成し、さらに独自の論評や注釈などを増補した『太平記』読解・鑑賞百科ともいえるべき『太平記大全』(一六五九年刊)、『太平記綱目』(一六七二年刊)が刊行されており、広く行なわれた。これらは、『太平記』を読む「童蒙」や、政道・兵学など

を学ぶ者にとつて、まことに親切な手引書であつたと同時に、理尽鈔講釈や、その後をうけて、この期あたりから盛んになってくる舌耕芸『太平記』講釈・太平記読みの虎の巻でもあつたと考えられる。

右のうち、『太平記大全』については、前稿<sup>①</sup>において、紹介・検討を行なつたので、引き続き、近世初期における『太平記』注釈書・評判書の最大の集成書であり、講師の愛用書でもあつたと考えられる『太平記綱目』をとりあげてみたいと思う。本書には、写本は現存せず、版本でのみ伝わっているが、刊記がなく、成立年代や刊年には検討の余地がある。また著者原友軒も、経歴等不明の人物であるので、まずその成立や著者について検討することから始めてみたい。

## 二 『綱目』の成立

『太平記綱目』の成立や著者については、確かな外部資料がほとんど見当らず、その版本そのものに手がかりを求めざるを得ない状況にある<sup>②</sup>。

『綱目』の巻頭には、村田通信の筆にかかる「太平記綱目序」が置かれている。通信は、この序文の中で、後醍醐天皇が、せっかく中興の業を成就しながら、正成の献策を容れず、忠臣を徒死させて、親政を崩壊に至らしめたことを嗟嘆した後で、「洛下人原氏友軒、

嘗読<sup>テ</sup>太平記<sup>ヲ</sup>、復似<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>快<sup>ニ</sup>々<sup>タルコト</sup>。于茲<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>矣、一日<sup>ニ</sup>披<sup>テ</sup>討<sup>ニ</sup>論<sup>スル</sup>此書<sup>ヲ</sup>者、数十篇<sup>ヲ</sup>、芟<sup>レ</sup>繁<sup>存</sup>正<sup>幾</sup>、以為<sup>レ</sup>篇、名<sup>ヲ</sup>『太平記綱目』と、本書成立の由来に触れ、終りに、「寛文戊申仲夏甲辰日 洛下 村田通信 序」と記している。

すなわち通信は、京都の人原友軒の著わした『太平記綱目』の稿をみて、「若<sup>キハ</sup>此書<sup>ノ</sup>、則<sup>チ</sup>曲<sup>尽</sup>人情<sup>ヲ</sup>、博<sup>ク</sup>明<sup>ク</sup>事实<sup>ヲ</sup>、読<sup>シ</sup>者<sup>ノ</sup>何<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>晚<sup>ク</sup>々<sup>ヲ</sup>焉」と推奨し、寛文八年(一六六八)五月六日に、京洛において、この序文を執筆したわけである。

『綱目』の巻頭部には、右の通信の序文のほかに、著者原友軒自身の筆になる「太平記綱目凡例」が載せられている。「凡例」は一つ書きで、「一、是<sup>レ</sup>編<sup>ニ</sup>太平記正文、大書<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>綱<sup>ト</sup>、以<sup>テ</sup>諸名家之評<sup>ヲ</sup>、細書<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>目<sup>ト</sup>」に始まり、「寛文戊申仲夏 洛下 原友軒題」という記文で終っている。ここでも寛文戊申(八年)という年記があり、この序文と凡例の年記にもとずいて、従来『綱目』の成立・刊年を寛文八年(一六六八)とみなすものが多く、筆者などもそれに従つてきた。

ところが、『綱目』には、このほかに著者原友軒が執筆した「太平記綱目後序」が載せられている。現存する版本では、その置かれている位置にちがいがみられ、巻頭の通信の「序」と友軒の「凡例」の間に置かれたもの(京都府立総合資料館蔵本・竜谷大学図書

館蔵本など」と、巻末の大尾の後に置かれたもの（内閣文庫蔵本・長坂成行氏蔵本など）との二種がある。本来は跋文と同じく巻末に置かるべきものであろう。

この「後序」において友軒は、南北朝五十年の治乱興亡を叙した『太平記』は、読者に「賢否得失之実」を考えさせ、「格物究理之助」となるものであるから、その「正文」（本文）と「諸名家之評騭」をあわせて、六十巻の『太平記綱目』を草したと、本書編著の趣意を述べ、さらに、書林某がこれを一読して上梓をすすめ、不備をおそれて辞退したが、再三の申し出により刊行を決意したという、出版に至った経緯を明らかにしている。

一そして最後に、「寛文壬子春三月既望、操<sup>ル</sup>毫<sup>ヲ</sup>于尾陽之旅館<sup>ニ</sup>。原友軒」と記している。つまり、この友軒の「後序」は、寛文十二年（一六七二）三月十六日に、尾張の旅宿において執筆されたものである。この「後序」の年記に従えば、本書の刊行は、寛文十二年三月以降ということになるわけである。

しかるに、近世の書林が編集・刊行した出版目録の一つである寛文十年（一六七〇）刊の『増補書籍目録<sup>作者付</sup>』<sup>3</sup>をみると、その「軍書」の項に、『太平記』関連書の一つとして、「六十冊 同綱目 原尤軒」という記載があり、同年には、すでに刊行されていることが知られる（これ以後の寛文十二年刊『増補書籍目録』、延宝三年

刊『古今書籍題林』などにも記載されている）。

これらを年表風に並べてみると、

寛文八年（一六六八）五月六日

村田通信の「序」原友軒の「凡例」の日付、

寛文十年（一六七〇）

この年刊行の出版書籍目録に記載さる、

寛文十二年（一六七二）三月十六日

原友軒の「後序」の日付

ということになる。

このような事実と、『綱目』の成立・刊行との関わりを、どのように解すべきであろうか。

『綱目』の草稿が、寛文八年五月の段階で完成していたことは、それを閲読して推賞した、前記村田通信の「序」によっても知られるが、翌寛文九年に著述・刊行された、同じ通信の「補正成伝」（楠河州伝）<sup>4</sup>自序にも、「洛人原生輯『太平記綱目』、請<sup>シ</sup>余<sup>ヲ</sup>為<sup>シ</sup>序、仍読<sup>シ</sup>文」とあり、『綱目』を読んで刺戟をうけ、正成伝を草したことが記されている。

従って、『太平記綱目』は、寛文八年（一六六八）五月には、「序」「凡例」などをふくめて完成しており、おそらくその年あたりに、最初の版が刊行されたものと思われる。これが寛文十年（一六

七〇) 刊の出版書籍目録に記載されているものである。

そして最初の版から四年後の寛文十二年(一六七二)に、友軒の「後序」を付した第二版というべきものが、刊行されたと考えられる。「後序」は、前述のように、これを巻頭部に載せた版と、巻末においた版とが現存しているから、この「後序」を付した第二版は、少なくとも二度、別箇に刊行されたことになる。

現存する『綱目』の版本は、無刊記であるために、どれほど版を重ねたか明らかでないが、右にみた事実によって、少なくとも三度にわたって刊行されたことが知られ、その需要が少なくなかったことがうかがえるのである。

以上みてきたように、『綱目』の成立・刊行の経過は単純ではなく、不明な点も残るが、寛文八年(一六六八)には成立しており、刊行も同年頃とみなしてきた従来の見方は、ほぼ誤りないであろうことが、確認できたわけである。

### 三 著者原友軒と医薬の業

ところで、『綱目』の著者が原友軒なる人物であることは、これまでみてきた『綱目』の「序」「凡例」などによって、疑いのないところであろう。しかし、さきにもふれたように、この友軒が、どのような出自や経歴の人物であるかについては、ほとんどまったく

わかっていない。

現在、友軒についてわかっているのは、(一)、『太平記』とその注釈書・評判書を愛好してやまない人であること、(二)、京都の人であること、(三)、村田通信の知友であること、(四)、寛文九年成立・刊行の「楠正成伝」(村田通信著)の巻末に跋文を寄せていること、ぐらいであろう。

つまり、原友軒なる人物について推測する手がかりは、『太平記』と京都と村田通信ということになるか。以下、これらの点から、著者友軒の周辺をさぐってみたいと思う。

村田通信は、生没年も明らかでないが、宛庵と号し、前記の「楠正成伝」(一六六九年刊)、漢詩や随筆を集めた『宛庵雑録』(元禄七年||一六九四年刊)などの著書のほか、俳諧辞書の『眠齋集』(一六八二年刊)、漢詩作法書の『詩林良材』(一六八七年刊)、『詩林良材後編』(一七〇六年刊)に、それぞれ序文を寄せている。『宛庵雑録』を解題した中村幸彦氏が、「宛庵は医学・和算など理科系の人らしいが、幕初啓蒙期の一端を示す書物の一である」と評されているように、中広い分野で活躍した文人・学者であったようだ。

この村田通信(宛庵)の経歴で注目されるのは、彼が本来医学など理科系の人であったらしいことである。江戸時代初・中期において、『太平記』の読み・講釈や注釈・刊行などに関わった人に、医

薬を業とする者が、すこぶる多くみうけられるという事実については、かつて旧稿<sup>⑥</sup>において指摘したことがある。

中世末期から近世初頭にかけて、『太平記』の読み聞かせや講釈を行なった、山科言経・永田徳本・遠藤宗務らは、いずれも医を本業とした人たちであるし、『太平記』古活字版を初めて開板した五十川了庵は名医として聞え、『太平記』の最初の本格的注釈書『太平記賢患鈔』を刊行した医徳堂守三は医書の版元であった。また近世初期に、『太平記理辰鈔』講釈や『太平記』読みに名のあった岡山の和田養元や加賀の佐々正益も医者であった。さらに近世中期においても、京都の原栄治（和平）などは、売薬業のかたわら、太平記講釈を行なっていた。

以上は、旧稿においてとりあげた事例であるが、『綱目』に先だって『太平記』の注釈書・評判書を集成した『太平記大全』（一六五九年刊）の著者西道智も医を業とした人と伝えられているし、『太平記』を愛読し、『補正成伝』を著わした村田通信の例も、それに加わるわけである。

こうした『太平記』『太平記』読みと医薬の業との結びつきの強さは、どこからくるものなのか、いま一つ明らかでないが、近世の『太平記』読み・講釈師が、一種の啓蒙家でもあったことを考えれば、当時最も開明的な知識人であった医者と結びつく可能性は考え

られるし、或いは旧稿でもふれたように、講釈師などと同じ舌耕の徒であった香具師（やし）は、本来薬師であり、近世においては、香具や薬を売り、時には医療にもたずさわっていたことなども思いあわされるのである。こうした『太平記』と医薬の業との結びつき、とりわけ先達の西道智の例や知友の村田通信のことなどを考えあわせると、原友軒の場合も、医薬と何らかの関わりを持っていたことも考えられよう。原芸庵・原双桂・原雲沢・原勤堂など、近世には原姓の名医が多く見うけられることも思いあわされる。

#### 四 著者原友軒と舌耕の業

『綱目』の著者原友軒についての右の憶測は、村田通信を手がかりとして試みたものであるが、『太平記』と京都とを手がかりにしてみると、また別の側面が浮かび上ってこよう。

さきに京都で売薬のかたわら、『太平記』を読んで人気があった原栄治なる「太平記講釈師」のことにふれたが、栄治の父原栄宅も「宝永年中二京都太平記講談ノ宗匠也」<sup>⑧</sup>、「辻講釈をする者、翁が幼稚の頃迄は、原栄宅と云上手有り」といわれているように、京における太平記講釈の上手として聞こえ、その子二代目栄宅（栄治の兄）も講釈師であった。栄治は、『松室松峽日記』寛保三年（一七四三）四月二十二日条に、「栄治前名和平、近来在北野七本松」<sup>⑨</sup>作<sup>レ</sup>家

益々聴衆聚ル」とあるように、京の北野七本松に太平記場をかまえ、常時『太平記』の講釈を行っていたようである。

また『本朝世事談綺』の「太平記読」の項には、「又その頃赤松清竜軒といふ者、堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乗て軍談を講ず。京都にては原永暢といふ者世に鳴る」とある。この原永暢は、或いは前記の原栄宅のことかも知れないが、赤松清竜軒が、わざわざ原昌元と名乗って、『太平記』を講じたという点が注目をひく。

こうした状況をふまえて、中村幸彦氏は、「この原一族は、恐らく『太平記綱目』の編者原友軒と一族、又は師弟などの関係があり、原昌元（青竜軒）も亦、同じ圈内にある人物ではないか」と推測されている<sup>⑬</sup>。

『節信雜誌』<sup>⑭</sup>によれば、赤松清竜軒が、堺町において、よしず張りをかまえ、原昌元と名乗って軍談を講じたのは、元禄十三年（一七〇〇）の頃のことであるという。とすれば、『綱目』が刊行されたから、二十八年ほど後のことになるわけで、『太平記』読みの虎の巻であり、たね本であった『綱目』の著者原友軒にあやかって、或いは本宗と仰いで、赤松清竜軒が、あえて原昌元を名乗って、『太平記』を講釈した可能性は、十分考えられるのではなからうか。もう一人の原栄宅（永暢）も、前記のように、この元禄・宝永の頃、京都の太平記読みとして名声があつたとされているが、貞享四

年（一六八七）以前から、若き近松門左衛門と組んで、『徒然草』の講釈などを行なっているし、元禄四年（一六九一）には、和歌山で、『太平記』を講じていることは、かつて紹介した<sup>⑮</sup>。この原栄宅は、前記のように「京都太平記講談ノ宗匠」であるから、ほぼ同時に京都に在住した原友軒と、何らかのつながりがあつたとしても、決して不思議はないと思うのである。

#### 赤松派の太平記読み

中世から近世にかけて、『太平記』読みにたずさわる者に、赤松氏とかわる者・赤松姓を名乗る者が多いことは、以前にも考えてみたことがあるが、とくに近世においては、軍書講釈の始祖とされる赤松法印をはじめ、太平記講釈の最初ともいわれる赤松清左衛門（名和清左衛門とも）、その兄弟ともいわれる前記の赤松清竜軒、同じ頃浪花で知られた赤松梅竜など、多くは伝承的存在ではあるが、赤松姓の太平記読みが目立っている。

赤松氏は、『太平記』において、円心父子を中心にすくなくならぬ活躍をみせているし、室町幕府の有力な守護大名であった。嘉吉の乱後も一時再興したが、戦国期には、家臣浦上氏にとつてかわられ、凋落した。その一族には、円心の子孫であることを誇りとしながら、太平記読みなど舌耕をもって世をわたる者が、実際にかなりいたも

のと思われる。赤松氏は、いわば「読みの者」<sup>17</sup>であり、太平記読みの家というべき一族であったと考えられ、近世初頭の軍談・太平記読みにおいては、この赤松派が主流的位置を占めていたわけである。

このことは、近世初期における太平記理尽鈔講釈・太平記講釈のテキストでもあり、虎の巻でもあった『太平記評判秘伝理尽鈔』、『太平記評判私要理尽無極鈔』において、赤松一族が重要な位置を占めていることも対応しているよう。

『理尽鈔』の冒頭におかれている「名義并来由」という『太平記』の作者・成立説においては、『太平記』の巻七・巻八の二巻は、赤松律師則祐（円心の三男）と作者玄恵が会談して書かれたもので、『赤松合戦記』ともいわれたとする。『理尽鈔』の本文においても、この則祐が、しばしば登場して、正成や義貞と兵法問答などを行なっているが、例えば、「凡赤松カ三千余騎ハ、金鉄ノ勇士也」（巻八の2オ）とか、正成が、「則祐ノ桂川ノ合戦ヲ手本ニセヨ」と賞賛した（巻八の34オ）とかいったように、おおむね赤松氏に好意的で、則祐らを称揚する記事を多く載せている。

もう一つの評判書『無極鈔』の場合は、さらに赤松氏との関わりが密接である。本書が、嘉吉の乱を起こして没落した赤松満祐の日記や言葉を度々引用し、満祐や赤松一族を不自然なほど称揚していることについては、すでに関英一氏の指摘がある。

また別稿でもふれたが、『無極鈔』巻十六の中巻には、「楠木判官兵庫ノ記」という、正成が兵庫から家臣恩地に托して故郷の正行に送った軍略の教訓書が収められているが、この書なども、もと赤松満祐が「家ノ書」として秘蔵していたものであるとし、『無極鈔』作者と赤松氏との間に、何らかの関わりがあったことを示唆している。

また、これらの評判書には、「則祐律師ハ、兵ノ七書ノ道ヲモ、ヨクヨク心得タル人ナリ」（『理尽鈔』巻八の17オ）とか、「赤松満祐、兵法八種ノ根源ト云コトヲ立置レタリ、（中略）四武ノ衝陣ノ事家々ニ沙汰有、是赤松家ノ用ル心也」（『無極鈔』巻二十之二の17オ）というように、則祐や満祐が兵法に精通した人物とされ、赤松氏は兵法において一家をなした家のごとく記述されている。

この両書は、ともに楠木正成の兵法・軍略・治政に関する評言や伝承を中心に構成されており、近世初・中期において世に行われた楠流兵法・太平記流兵法の秘伝書という側面を持っているが、両書において楠木氏に次いでクローズアップされている赤松氏であるというわけである。

こうした赤松氏と『理尽鈔』『無極鈔』の浅からぬつながりを考えるならば、これらの評判書・秘伝書を、テキストとし、虎の巻として、理尽鈔講釈や太平記読みを行った軍談家や講釈師が、多く赤

松姓を名乗り、円心の子孫と称した由縁も首肯されよう。

信長・秀吉らに右筆として近侍した楠木長譜(正虎)や楠流兵学を講じたという由比正雪が楠木氏の出自を自称したり、『理尽抄』を大蓮院陽翁(日翁)に伝授したという名和昌三が名和長年の遠孫と称したりしたのも、ほぼ相似た事情を読みとることができよう。

名和長年もまた、正成の兵法・軍略に関する語録の聞き手・引き出し役として、『理尽抄』にも、しばしば登場しているのである。

## 六 原派の太平記読み

江戸で町講釈を創始し、『太平記』を初めて講じたといわれる見付けの清左衛門が、はじめ名和氏を称し、後に赤松氏を名乗ったのは、初期の太平記読みが状況に応じて名乗りを変えながら舌耕していたこと、赤松氏を名乗ることが営業上有利であつたらしいことを物語っている。

ところで、元禄も後期の頃の赤松青竜軒は、原昌元と名乗りを改めて軍談を講じたという。この間の事情について、『節信雑誌』<sup>②</sup>は次のように伝える。

元禄十三年、赤松青竜軒と云者、堺町において葭實張を構へ、原昌元と名乗り、軍談を講ず、大ひに行われしかば、中の町奉行、松前伊豆守殿召て聴聞せられたり、其時種々の尋ねに、実

は播州三木の地土、赤松祐輔青竜軒といへる者なりと答しかば、然らば円心の末裔なりやと、再び問はれしに、恥たるおもちして、御尋の通りなりと申上しかば、若干の目録を賜りて帰国せり、

これまでみてきたように、赤松家は、『太平記』とも兵法も関りの深い由緒ある名族であり、赤松法印以来、話芸の専家としても聞えた一族であつた。したがって、近世初期の太平記読み・舌耕家にとつて、赤松の姓を名乗り、円心の子孫を称することは、一種の誇りであり、ステータスでもあつたが、反面そうした名族の出自でありながら、一介の舌耕芸人に零落していることは、恥とすべきことでもあつたわけである。

そうした心意もあつてか、赤松青竜軒は、原昌元と芸名を名乗りにかえて、軍談を講じたという。この原昌元以前には、原姓の太平記読み・軍談師は見当らないが、昌元以後、原姓を名乗る者が目につくようになってくる。こうした点から推測して、元禄期の終り頃、原昌元は、太平記流赤松派から出て、新たに原派といふべきものを立てたとみなしてさしつかえあるまい。

そして、赤松青竜軒が原姓を名乗り、その後も原姓の太平記読みが輩出するようになったのは、おそらく『太平記綱目』の著者「原友軒」にあやかつたのことで考えられる。

前述のように、寛文八年（一六六八）頃に成立・刊行され、その後も版を重ねたとみられる『太平記綱目』は、近世初期にあらわれた『太平記』の注釈書・評判書の類を、網羅・集成しているばかりでなく、「追解」として、これまでの注釈の欠を補い、「通考」として独自の論評（『太平記』中の合戦・事件・人物などについての批評）を加えるなど、『太平記』を読み、講釈する者にとつては、この上ない指導書であり、百科総覧であった。

「追解」「通解」などによってうかがうに、著書原友軒は、和漢の儒書・史書などに通曉して、注釈学者としての力を示す一方、兵法・軍学について知識も博く、兵学・政道などに一家の見識を持っていたように見られる。原昌元らが、この原友軒を本宗と仰いで、原派といふべき太平記読み一派を興したとしても決しておかしくないと思うのである。

『太平記』の本文中にも、原姓の武士が何人か登場するが（原四郎太郎・同四郎次郎・同四郎三郎）―巻二十五「住吉合戦事」、原八郎左衛門―巻二十九「越後守自石見引返事」、原三郎左衛門義実―巻二十九「小清水合戦事」<sup>22</sup>）、いずれも楠木・名和・赤松のように、近世の太平記読みが、それにあやかっつて子孫を名乗るほどの働きはみせていない。

ただし、「太平記読みの家」赤松氏に連なる一族の中に、原氏の

系統も存在する。『増訂印南郡誌』前編の人物篇「別所村」の項に、原小五郎重親・同治左衛門重菴の名が挙がっており、

重親は村上源氏、赤松則村九代の孫、神西郡永良荘鶴居城主永良近江守雅貞が三男也、初め永良小五郎と称せしが、後原小五郎と改む、

とある。そして重親は、秀吉の中国征伐の折、秀吉に弓勢を賞され、致仕をすすめられたが、それを拒み、父祖の地播州に退居した。その子孫別所村に住し、重親五代の孫重菴は「附近二十箇村の大莊司職」に補せられ、すこぶる勢力があったという。

元禄の前、貞享の頃に、赤松氏の一族別所氏に関わるかと思われる別所掃部と称する太平記読みがいたことは、旧稿で紹介した。原友軒をはじめとする原姓の太平記学者・太平記読みが、右記の赤松氏系原氏と関わりがあった可能性も考えられようが、今はこれ以上の判断材料を持たない。

ただ、『綱目』に先行して、近世初期における『太平記』の注釈書・評判書を集成した『太平記大全』は、『理尽鈔』は収めているが、『無極鈔』はとりあげていない。これに対し『綱目』は、『理尽鈔』とほぼ対等に『無極鈔』をとりあげて、これを重視する姿勢をみせている。前にもふれたように、『無極鈔』は赤松氏ととりわけ関わりの深い評判書であったことを考えあわせて、綱目の著者原友

軒と赤松氏との間に、何らかのつながりがあったのではないかと、今は憶測をめぐらすばかりである。

本稿では、『太平記綱目』の紹介・検討の手はじめとして、まずその成立や著者に関する問題を考えてみたが、『綱目』の内容・特質・意義などについては、稿を改めたいと思う。

注

- ① 拙稿「『太平記大全』について——『太平記』研究史の一章——」(『室町藝文論叢』所収、平3、三弥井書店)。
- ② 調査・参照した『太平記綱目』の版本(いずれも無刊記)は、次の諸本である。内閣文庫蔵本・京都府立総合資料館蔵本・龍谷大学図書館蔵本・池田文庫蔵本・長坂成行氏蔵本・架蔵本。
- ③ 慶応義塾大学斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』第一巻(昭37、井上書房)による。以下の寛文十一年刊『増補書籍目録』、延宝三年刊『古今書籍題林』も同じ。
- ④ 北海学園大学附属図書館北駕文庫蔵「補正成伝」写本による。
- ⑤ 中村幸彦氏「宛庵雜録」(『日本古典文学大辞典』第五巻収載、昭59、岩波書店)。
- ⑥ 拙稿「『太平記』読み—中世末期から近世初期へ—」(『日本のことばと文芸』第四集所収、昭57・12、のち『太平記享受史論考』に収載、昭60、桜楓社)。
- ⑦ 注①の拙稿参照。
- ⑧ 『松室松峽日記』寛保三年四月二十二日条—宗政五十緒氏「松峽 松室熙載年譜」所引(同氏「日本近世文苑の研究」所収、昭52、未來社)

- ⑨ 「翁草」巻六十六「講釈師今岡の事」(日本随筆大成第三期十二巻所収、昭6、日本随筆大成刊行会)
- ⑩ 注⑧に同じ。
- ⑪ 『本朝世事談綺』(日本随筆大成第二期第六巻所収、昭3、日本随筆大成刊行会)
- ⑫ 中村幸彦氏「『太平記』の講釈師たち」(『グラフィック版』日本の古典〈第九巻〉『太平記』所収、昭50、世界文化社、のち「中村幸彦著述集」第十巻収載、昭58、中央公論社)
- ⑬ 注⑫に同じ。
- ⑭ 「節信雜誌」は、『古事類苑』楽舞部二十三「講談」の項に所引の記事による。
- ⑮ 拙稿「形成期の『太平記』読み—「家乗」の記事を中心に—」(『国語と国文学』62巻11号、昭60・11)
- ⑯ 拙稿「中世における『太平記』読み」について—『藤涼軒日録』の記事を中心に—(『軍記と語り物』第9号、昭47・3、のち『太平記享受史論考』に収載、昭60、桜楓社)
- ⑰ 延広真治氏「軍談・実録・講釈」(『日本文学全史4、近世』所収、昭53、学燈社)
- ⑱ 関英一氏「『太平記』評判無極鈔」と赤松満祐」(『国学院雑誌』88巻6号、昭62・6)
- ⑲ 拙稿「『太平記』評判」に関する補説—「理尽鈔」と「無極鈔」をめぐって—(『太平記とその周辺』所収、新興社より近刊予定)
- ⑳ 『太平記評判秘伝理尽鈔』奥書、有沢永貞「『太平記』理尽鈔由来書」(『尊経閣文庫蔵』など)。
- ㉑ 「節信雜誌」の引用は、注⑭に同じ。
- ㉒ 「『太平記』の章段名などは、日本古典文学大系本(岩波書店)による。

⑳ 『増訂印南郡誌』前編（大正5初版、昭和60復刻版、臨川書店）

㉑ 注⑮の拙稿。

〔補記〕

小稿の「はじめに」において、「理尽鈔」などの「太平記」評判書盛行の背景に、近世の支配層・武士層などの要求に合致するところがあったことを述べたが、このことに関連しては、近時、若尾政希氏が、「理尽鈔」の政道論・政治論の検討や、それが近世の為政者・武士・庶民に及ぼした政治的・思想的影響の調査研究などを精力的に進めておられるのが注目される（同氏「近世初期における『国家』と『仏法』——『太平記読み』研究序説」『国家と宗教』所収、平4、思文閣出版、ほか）。